XI.病理診断科　　管理指導医：吉村　道子

1.　研修目標

病理診断科の研修では、病理診断を経験することによって、種々の疾患の病理学的特徴を学び、病理学的思考能力、病理学的問題解決能力を身につけることを目標とする。病理学的思考能力は、病態全体を俯瞰する総合的な能力であり、病理専門医・臨床医いずれを目指す者にとっても必須なスキルである。質量とも充実した本院の症例の病理診断を経験することで、上記の目標にふさわしい充実した病理研修を積むことができると考えている。

2.　研修方略

研修内容

病理専門医の指導の下、実際の病理診断（剖検・組織診断［手術材料および生検材料］・細胞診断・迅速診断）を行う。切り出し等にも参加し、検体を扱う基本的な能力を身につける。また、CPC や症例検討会に参加し、発表することにより、実際の診療における病理診断の役割を理解するとともに、病理所見のプレゼンテーションの仕方を習得する。研修スケジュールは下記のとおりである。

	朝	午前	午後	夕方
月		標本チェック 診断・所見の確認	切り出し	
火		標本チェック 診断・所見の確認	切り出し	（第2火曜）婦人科病理検討会
水		標本チェック 診断・所見の確認	切り出し	（第1・3水曜）乳腺カンファレンス （第4水曜）CPC
木		標本チェック 診断・所見の確認	切り出し	
金		標本チェック 診断・所見の確認	切り出し	

・切り出しは毎日１２時３０分より開始する。（１時間から２時間程度）
・剖検がある場合は、解剖資格を有する病理医の指導の下で、助手として入る。
・午前の標本チェックは、ディスカッション顕微鏡を用いて、前日に検鏡した標本を病理専門医が行う。その後、所見の追加・修正を研修医が行い、病理専門医が最終確認をする。
・志望する科に関連する疾患について、既往標本より自由に検鏡し、病理専門医から解説を受けることができる。

3.　行動目標

（1）経験目標（経験すべき診察法・検査・手技）

1）　基本的目標（一般的目標）

①　各疾患の病理学的特徴および臨床的特徴についての基本的知識を身につける。
②　病理診断を通して、病態を正確に把握し、これを表現する能力を身につける。
③　剖検を通して、全経過にわたる患者の病態を俯瞰的に把握し、統合する能力を身につける。
④　臨床所見、画像所見と病理所見を関連づけ、統合する能力を身につける。

2）　具体的目標（個別的目標）

①　剖検

a.　剖検の意義を理解する。
b.　死体解剖保存法に従って必要な法的処置をとり、遺体に対して礼を失することなく丁重に取り扱うことができる。
c.　CPC レポートを作成し、症例呈示を行える。

②　生検、外科切除検体の病理診断

a.　固定法など検体の適切な取扱い方について理解する。
b.　生検診断が疾患の確定診断となり、患者の治療方針、予後予測の重要な指標となること

を理解する。

c. 切除材料の肉眼的所見を観察、記録する技術を身につける。
d. 切除材料の適切な切り出し方を身につける。
e. 基本的な組織所見を正確に把握し、記録することができる。
f. 基本的疾患の組織診断ができる。
g. 特殊検査（一般特殊染色、免疫組織化学、分子病理学など）の基本的知識を理解する。
h. 病理診断における社会保険診療報酬の扱い、感染検体の取扱い方、医療廃棄物の取り扱い方などの基本知識を理解する。
i. 迅速診断
   - 凍結切片による迅速診断の意義と適応を理解する。
   - 凍結切片作製方法と染色手順を理解する。
j. 細胞診
   - 細胞診の意義と適応を理解する。
   - 各種採取方法、検体処理方法について理解する。
   - パパニコロウ染色、ギムザ染色等の基本的染色について理解する。
   - 細胞診断の基本手順を理解する。
   - 細胞診断の基本用語を理解する。
   - 代表的な悪性腫瘍細胞像を理解する。

4. 評価

1）研修医は、ローテート終了時に EPOC を用いて自己評価を行う。
2）ローテート終了時に、指導医が、EPOC を用いて 「研修医評価票 Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」により研修医を評価する。